

異分野にこそ、新しい発想のタネがある。人材マネジメントや経営学以外の学問、企業以外の人や組織を扱った本に、学びを探る。

過激派だけじゃない、イスラムを知る

イスラム教。世界3大宗教のなかでは、日本人にとって最もなじみの薄い宗教かもしれない。だがイスラム教徒（ムスリム）の人口は、2050年には世界96億人の人口の3分の1を占め、宗教人口のトップになるという予測がある。グローバル化が進む企業経営を考えるなら、「イスラム教のことは知りません」では、人事の仕事も難しくなるだろう。

本書は約35年間イスラム世界の研究を続け、ムスリムの友人・知人も多い筆者の宮田律氏が、「なるべくイスラムの人たちの論理に寄り添いながら」、彼らの日本人観、イスラムの徳に通じる日本人の倫理観、歴史的に構築された対日感情などを紹介する。イスラム初心者が、全体像をつかむのに適した一冊といえる。

たとえばアラブ人のムスリムは、日本人の何を評価しているのだろうか。「日本人はムスリムでもないのにイスラムの教えを実現している」という声

が紹介される。イスラムの善は誠実、禁欲、慈悲などだが、それらを日本人から感じているという。

またイスラムの教義には、「若者らしさを意味する『フトゥーフ』という倫理的概念が存在します」と宮田氏は言う。正義の遂行、言行一致、勇敢さ、忍耐、誠実などを徳目としており、確かにこれらは日本人にも、大いに共感できる部分だろう。

東南アジアにおけるムスリムの親日感情も紹介される。マレーシアでは1981年に当時のマハティール首相が、日本の発展を見習おうという「ルックイースト政策」を唱えた。インドネシアでは第二次世界大戦後、植民地支配からの独立運動に参加した、旧日本軍の軍人が存在したことが、同国での親日感情の萌芽につながったと指摘している。

このほか現地で活躍する日本人ビジネスパーソンやNGOの人たちの礼儀正しさを、敬意が感じられる付き合い

著者について



宮田 律氏

現代イスラム研究センター
理事長

Miyata Osamu_1955年山梨県生まれ。現代イスラム研究センター理事長。1983年、慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻修了。UCLA大学院修士課程（歴史学）修了。専門は現代イスラム政治研究、イラン政治史。

方、サッカーやポップカルチャーを通じた新たなイメージなど、「ムスリムの日本人に対する好印象の源」が、具体的な話や事例で示されていく。

ムスリムから日本人に寄せられる好意の紹介だけでなく、「原理主義」「テロ」など、マイナス面が強調され、偏りがみられる日本人のムスリムへのイメージを、少しでも変えようという試みもなされる。武装集団などが唱える「聖戦（ジハード）」という概念が、もともとイスラム教義のなかでどう位置付けられ、どんな経緯でテロを正当化する論理にも使われるようになったかの説明もある。一方で、「アフガニスタンのタリバンのような組織の活動は、イスラムの教えからは絶対に正当性を得られるものではない」など、戦闘的なジハードが、多くのムスリムにどう見られているかもわかる。

宮田氏は、「日本のビジネスパーソンは、これからも自信をもってムスリムと付き合いがいけばいい」と話す。先人たちが積み上げてきた、好印象の遺産があるからだ。もちろん、礼儀正しく、敬意をもって付き合い続けることは、これからも求められる。



『イスラムの人はなぜ日本を尊敬するのか』

著者／宮田 律
新潮新書 本体720円＋税
2013年9月刊行